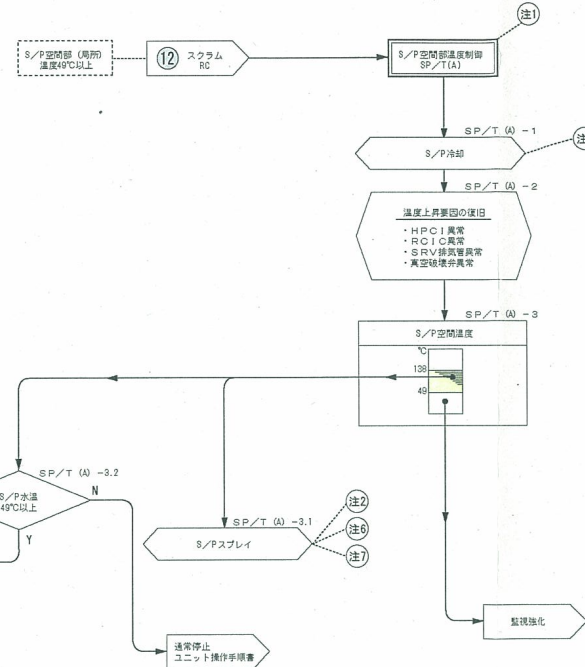
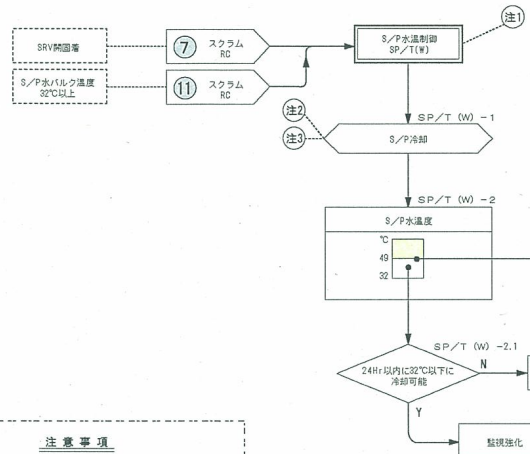
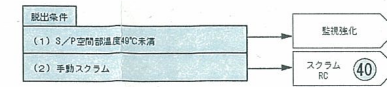
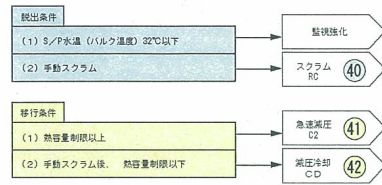
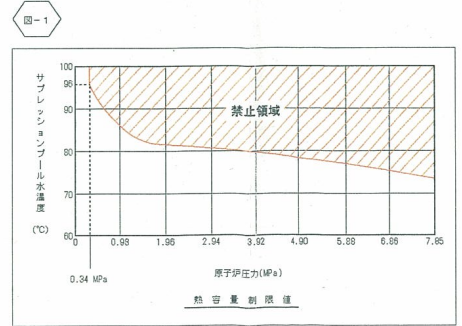
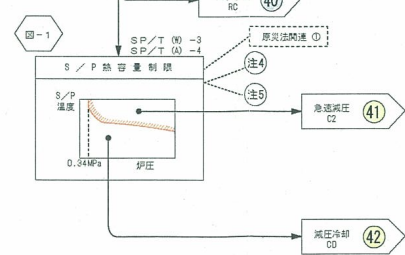


SP/T

「S/P温度制御」



- 注意事項**
- ① 格納容器の温度に関する制御値は次のように適用する。
 ・S/P冷却始温度……バルク温度
 ・スクラム制限温度……バルク温度
 ・S/P熱容量制限……高所温度
 ・D/W及びS/P空腔部温度……高所温度 #13
 - ② RHR系(LFC)モードで運転中の場合には、充分な炉心冷却の確認がなされるまで他の冷却モードに切替えてはならない。ただし、ATWS時にS/P冷却モードで運転中に、D/W圧力高異常等によってLFC1モードに切替わった場合、再度S/P冷却モードに切替える。 #14
 - ③ S/Pを冷却中にS/P圧力が上昇傾向の時または、S/P空腔部温度上昇が著しく場合には、RHR1起動は、S/Pスプレーに切替る。 #15
 - ④ 原子炉冷却材の確保、PCV健全性維持のためには、[55℃/H (最大RPM冷却時)] 以上の冷却が必要になる場合もある。 #15
 - ⑤ S/P水温が上昇するような事象が発生している時に、S/Pを吸込側としポンプを運転している場合には、ポンプキャビテーション防止のため、S/P水温と圧力を監視し、NPSHについての要求に注意すること。 #16
 - ⑥ PCVスプレーを起動させる場合は、S/P～D/W間の差圧並びにR/B～PCV間の差圧を監視し、差圧が設計値(-13.7kPa)を超えないように、スプレーの流量の制限あるいはスプレーの免許を行うこと。 #18
 - ⑦ PCVスプレーを起動させる場合は、S/P圧力を監視し13.7kPa以下となったならば責任になる前にPCVスプレーを停止する。RHRポンプによるPCVスプレーが作動できない場合には、代替PCVスプレー(MU#、FP)を起動させること。 #19
- 原災法関連**
- ①第15条 緊急事態：炉水容器内圧力が77.6kPaを越えて悪化した状態、または原圧弁と炉水容器が完全に隔離した状態においてRHR系の以下のモードが全て使用不能となり、かつS/C水平均温度が100℃以上に達した状態。
 ・停止冷却モード
 ・サブプレッションプール冷却モード
 ・格納容器スプレーモード



福島第一原子力発電所
SP/T
「サブプレッションプール温度制御」